

#### 第4回(3.11以降)読書会資料

- ヒロシマとアウシュビッツ
  - それらは絶滅という「それまでめざされてきた一切の目的とはもはや通約不可能な目的」(p. 32)、「戦闘をはるかに超えたところにある目的」に従事した。
  - 両者は人間の世界の「境界」を超えた。つまりヒロシマとアウシュビッツの「意味内容」は、「世界の存在からは独立した領野においてしか理解されなくなる」(p. 34)。
  
- ヒロシマとフクシマ
  - 原子力エネルギーという点で共通
  - 軍事/民生という差異⇒しかし原子力エネルギーをとりまく問題は軍事/民生という違いにかかわらず、またそれどころか文明全体に絡んでいる。
  - ではその“文明全体に絡む”ような“原子力エネルギーをとりまく問題”とは何か?⇒原子力の軍事利用がその概観を示している。
  
  - 原子力の軍事利用
    - A. 「恐怖の均衡」を目的とする。
      - しかしこの恐怖の均衡は「ただそれのみで働くのであり、なんらかの関係を巻き込むことはない」(p. 46)・・・シーソーのイメージ
      - AとBとが恐怖の均衡にあるときAとBとのあいだには関係があるのではなく**等価性**がある。
  
    - B. 原子力兵器は「絶対的な力」である。
      - この力を行使する人間は、その決断の効果を計算し尽くすことができない。「絶対的な力」の効果は**計算不可能**。

☆まさにここに取りだされた「等価性」と「計算不可能性」が「原子力エネルギーの一般的な利用ばかりではなく、おそらく、いっそう広範に、われわれに与えられた世界において諸々の力がどのように配置されているかをも特徴づける」(p. 48)。言い換えると、「力」の「配置」の様子を表すのが「等価性」と「計算不可能性」であるということ。

- 「等価性」
  - 「等価性とは、言ってみれば自分自身で自分自身を統治する力が有する性質」(p. 48)
  - 自動車の安全装置、医療技術などに例示されるような「こうした自己生成的、自己合成的[...]樹枝化を統べているもの、それが私が先に等価性と呼んだものである」(p. 50)
- 「計算不可能性」
  - 「通約不可能性」とは違う。前回「通約不可能性」は「優劣を判定する共通の評価基準がない」と理解した。たとえば人と人は「通約不可能」ではないか?
  - 対して「計算不可能」なものとは計算の対象になっても計算し尽くせないものこと。「消費エネルギー量」や「契約締結数」。

#### 第4回 (3.11以降) 読書会資料2

- 「通約不可能なもの」または「尊厳(価格を超出し等価物を許さない崇高なもの)」とはどのようなものか。また、それはどのような形で「民主主義」を思考することとつながるのか。(三神さん)
- 「等価性」と「計算不可能性」によって特徴づけられた「諸々の力の布置」をフクシマが範例的に体現したと第8節でいわれているが、ほんとうにそうなのか? アウシュビッツとヒロシマの場合は?(綿引さん)
- 非等価性のコミュニズムを肯定したところで人々は幸せになれるのか?(筆田さん)
- ナンシーは破局的な「等価性」を告発し、「非等価性のコミュニズム」を肯定する(p.71)。等価性に対置するものは、「評価しえないもの、通約不可能なものという値のつけられないもの」たちの平等性(人間存在が尊厳の点で厳密に平等)(p.70)であり、そこから出発しなければならないという。これは人間の尊厳を考える上で、理想とされる一見当たり前の事を言っている気がするのだが、みなさんはどうでしょうか?この意味での「平等性」(ナンシーが言うところの「分有」として「開かれ」たかたちで「共に」ある=「共出現」する(フランス現象学っぽい用語っぽいですが)とは、何か新しい事を言っているのだろうか。そうした事態は具体的にどういう事なのか。またそれが実現可能なものか。(加賀谷さん)